

『乱流・輸送・加熱に関する連携研究の進展と展望』

仲田資季（核融合研）

Q1（草野完也／名大）：機械学習によって観測不可能な量を測定するという話に関連して、核融合の世界でこのような手法を使っている研究は既にあるのか？学習データとしては、シミュレーションを使うのか？

A1：直接評価が難しい乱流輸送フラックス量の推定や巨視的な内部状態のトモグラフィーに関して機械学習を援用する研究があるが、乱流場構造の推定についてはほとんど無いと思われる。太陽の粒状斑観測とは異なり、磁場閉じ込めプラズマでは乱流場のイメージング計測の空間分解能が高くないため、当面は乱流シミュレーションデータの学習が主流となると予想している。